

元々「伝える」ものとしての言葉というものが気になっていた方だったと思いますが、現在のような形でドイツ語学と取り組むようになったのは、これまでの流れと出会いが大きかったような気がします。厳しくも恵まれた環境の中で学生生活を送ることができました。指導教官の在間進先生を始め、お世話になった諸先生・先輩方、そしてゼミの友人達に何よりもまず心からお礼申し上げたいと思います。

今回の論文は、現代ドイツ語のいわゆる bekommen 受動 (Er bekommt Blumen geschenkt. など) を意味論的な観点から分析・考察したものです。考察の主眼は、この受動文に認められるいくつかの制約について、包括的な説明を試みることにありました。その際、対応する能動文 (Sie schenkt ihm Blumen. など) と比較するのではなく、動詞 bekommen による他の一般的な構文 (Er bekommt einen Brief. など) との対比において捉え直すということを行なっています。これは、形式的により類似した構文との対比で考えるという、ある意味で単純な発想ですが、言うまでもなく、いわゆる「文法」も含め、言語を形式と意味の組み合わせからなる記号体系 (symbolic system) であると捉える近年の言語に対する認識に基づいたものです。

今回の考察の結果は、文法現象が、単なる記述の対象であることを超えて、意味という側面から説明可能であるということを示唆するものであるとも言えますが、この点については、今後さらに実証的な分析を通して合理化して行く必要があると思われます。私自身もその礎となるような研究を続けて行きたいと考えています。

略歴

1970年福岡県大牟田市生まれ。1997年東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程中退。博士前期課程在学中の1994年から1995年まで文部省派遣留学生としてエアランゲン大学に留学。東京都立三田高等学校非常勤講師を経て、1997年4月より島根大学法文学部講師。